

世界と実存

森永 駿

1. はじめに

本論ではハイデガーの『存在と時間』⁽¹⁾における「世界 (Welt)」概念の分析を取り上げ、われわれ現存在の存在である「実存 (Existenz)」に応じて、世界の現れ方が異なるということを取り出し、最後に、われわれ現存在が世界を欠くことが出来ない理由として、「開示性 (Erschlossenheit)」を挙げる。

本論の流れは以下の通りである。まず第2節において、われわれが日常生活のなかでそれとかわっている存在者である「道具的存在者 (das Zuhandene)」の分析を確認する。そこでは、道具の存在構造として「適所性 (Bewandtnis)」が取り出される。次に、第3節では、われわれがその内で存在していると同時にその内で多様な存在者が会われる場としての「世界」が分析される。ここでの議論によって、適所性という道具の存在構造が、現存在の存在可能性と密接に関係している「有意義性 (Bedeutsamkeit)」として捉え直される。そして、この有意義性が世界の構造であることが示されることで、世界と実存の関係も明らかにされる。最後に、本論の締めくくりとして、現存在の「開示性」について簡潔に触れ、われわれ現存在が決して世界を欠き得ないことに触れる。

2. 「道具」とその存在構造

『存在と時間』の世界分析は、まず、現存在の日常的なあり方の分析から始ま

る。次節で検討するように、世界とは、現存在がその内でさまざまな存在者とかかわりつつ存在している場として考えられている。世界概念の分析は、現存在の平均的日常性の分析から、世界の構造である世界性へと進められる。本論でも『存在と時間』の議論にしたがい、世界分析の準備として、まずは本節にてわれわれ現存在の日常的なあり方を検討しよう。

われわれは普段、どのように存在しているのか。われわれの日常的なあり方とは、たとえば「何かにかかわり合っている、何かを製作する、何かを整理し世話をする、何かを使用する、何かを放棄し紛失する、企てる、やり遂げる、探索する、問いかける、考察する、論じ合う、規定するなど」(SZ, 56-57)である。『存在と時間』ではこうした現存在のあり方を「配慮的な気遣い (Besorgen)」と呼ぶ。この配慮的な気遣いとは、われわれ現存在の日常的な周りの存在者とかかわりを指す術語である。ハイデガーは現存在のこのようなあり方を分析することで、日常生活においてわれわれの周りの存在者が「何」として現れているのか、そしてその存在構造はどのようになっているのかを明らかにしていく。

2-1. 身近な存在者としての「道具」

われわれは日常生活で「何」と出会っているのだろうか。われわれは普段、「何」とかかわって生活しているのだろうか。われわれの周りに存在しているものは、いったい「何」なのだろうか。「何」がわれわれを取り囲んでいるのだろうか—これらの問いに対し、ハイデガーは「道具 (Zeug)」と答える。日常生活の中で真っ先に会われる存在者とは、○○の大きさを備え、○○の素材で作られた重さ○○グラムの「物 (Ding)」ではなく、たとえば「文房具、裁縫具、仕事や乗用や測量のための道具」(SZ, 68)なのである。ハイデガーは『存在と時間』のなかで、「最も身近に会われる存在者」として「道具」という存在者を分析している。

では具体的に、ハイデガーは「道具」という存在者をどのように捉えているのか。『存在と時間』のなかで道具は、「～するための手段である或るもの (etwas, um zu...)」(SZ, 68) と定義されている。たとえば、ハンマーであれば「打つための手段であるもの」、ペンであれば「書くための手段であるもの」、メガネであれば「より良く見えるようにするための手段であるもの」などと捉えることができる。ハンマーで打ったりペンで書いたり、メガネで遠くを見たりといった、道具的存在者とのかかわりのことを、ハイデガーは「配慮的な気遣い」と規定する。

2-2. 道具の指示

われわれの身の回りに存在しているものは、いずれも、何かしらの「手段性」を備えた存在者なのであり、そうした手段性を欠いたただ単に存在しているだけの「物」ではない。ハイデガーは道具の「それ自体としてのあり方 (An-sich-sein)」を「道具的存在性 (Zuhandenheit)」と名付け、物の「事物的存在性 (Vorhandenheit)」というあり方から区別している。

以上のように道具は、文字を書くために有用であったり釘を打つのに役立つたりと、さまざまな「手段」となる。道具にはそれぞれさまざまな「手段性」が備わっているのである。言い換えればこれは、道具にはそれが何のために使用されるのかという「用途性 (das Wozu)」が備わっている、ということでもある。たとえば「靴」という存在者は、「足を保護するためのもの」という使用用途を備えている。それぞれの道具には、それが何のために使用されるのか、何に役立つのかという用途性が備わっているのである。

このことは、壊れて使用できなくなってしまった道具であっても同様である。たとえば、使い古して底に穴が空いてしまった靴の場合、もはや「足を保護するためのもの」としては使用できない。したがってその靴を前に、われわれは一瞬

戸惑い、それまで「道具」として出会われていた靴という存在者が単なる「物」として出会われてくる。しかしその「物」としての現れは一瞬で、われわれは直ちにその靴を「処分するためのもの」や「思い出として保管しておくもの」として捉え直し、別の靴を手取るだろう。すなわち、靴の用途性が切り替わるのである。このように、われわれが普段かかわっている周りの存在者は第一次的には道具として現れるのであるが、時折それらが単なる「物」として現れることもあるのである⁽²⁾。

上記のように、個々の存在者は、それぞれに備わっている用途性を指し示している。その道具が何に役立つのか、何の助けになるのかということが予め指示されているからこそ、われわれはそれを手に取り、われわれが望むあり方、たとえば、足を怪我することなく快適に歩行する、というあり方を実現できるのである。したがって道具の存在には、みずからの用途性を指示しているという「指示 (Verweisung)」という構造が含まれている。

また道具的存在者には、用途性の他にも、さまざまな事態や存在者のあり方（たとえば靴の用途性は、地面がザラザラしていて危険である、という事態に起因する）への指示や、他の存在者（靴であれば、牛や糸など、素材となった存在者や靴の使用者など）の指示も含まれている。

以上の靴の例からわかるように、道具という存在者は、その内にさまざまな指示を含んでいる。だからこそ、われわれはそうした道具を通し、その他の存在者とも出会い、かかわっているのである。道具が指示しているのは、その道具自身の用途性やその使用状況だけにとどまらず、さらに、その道具が作られる際に素材や原料となった他の存在者への指示、そして道具の使用者やその製作等にかかわった人々への指示もまた含まれているのである。

2-3. 道具連関

上記のように、道具として出会われる存在者は、他のさまざまな存在者を指示するという存在構造をもつ。そしてこれは言いかえれば、諸々の道具は他のものに「指示されている」ということでもある。

たとえば牛の革は、靴というそれとは別の存在者、しかもまだそこには存在していない（製作されていない）存在者によって指示される。その指示を読み取って、靴職人はその革を手に取り、さらに別の布という存在者、そしてそれを縫い合わせるのに手頃そうな糸という存在者を手に取り、それらを使って靴という一つの存在者（作品）を作り上げる。この作品として作り上げられた靴によって、先の牛革や布、糸という存在者は素材として指示されている。靴職人がその際、木材やガラスといった別の存在者を手にとらなかったのは、彼がこれから作ろうとしている靴が、そういった存在者たちをその素材として指示していなかったからである。

このように、諸々の道具は、指示すると同時に他のものによって指示されているというあり方で、われわれに出会われるのである。「存在者は、その存在者がそれであるこの存在者として、あるものへと指示されているということ、このことを基盤として、その存在者は発見されている」（SZ, 84）。

こうした道具に備わるさまざまな「指示」は互いに繋がりが合い、一つの連関を作り上げる。とりわけ、それぞれの道具に帰属する「手段性」によって、「道具全体性（Zeugganzheit）」が構成される。

有用性、寄与性、使用可能性、手頃さといった「手段性」のさまざまな様態が、道具全体性を構成するのである（SZ, 68）。

たとえば、靴職人の作業部屋を想像してみよう。彼の部屋には工具や機材、靴

の材料など、さまざまなものがあるだろう。しかし、互いに無関係なものが、あるいは靴を作ったり修繕したりといった作業とは何も関係の無いものが、ただ乱雑に部屋の中に置かれていることはない。作業部屋にあるものはいずれも、その職人が靴の製作や修復の際に使用するものであり、また、それらの作業がしやすい位置にそれぞれ配置されている。このとき、「作業部屋」が一つの道具全体なのである。つまり、「靴を作ったり修繕したりするための部屋」という一つの道具の中に、靴を作ったり修繕したりするのに適した道具が過不足無く、なおかつそれぞれに適した位置に配置されているのである。

道具は、ただ一つの存在者が存在するのみでは「道具」たりえない。必ずその道具に先立って道具全体性が与えられていなければならない、その全体性の内でのみ、道具は「道具」として存在できるのである。

厳密に解すれば、一つの道具が「存在している」、ということは決してない。道具の存在には、そのつどつねに何らかの道具全体 (ein Zeugganzes) が属している。道具はそうした道具全体の内でも、まさに当の道具として存在可能なのである (SZ, 68)。

2-4. 適所性

こうした道具の指示という構造、そしてそれによって形成される道具連関から、「適所性 (Bewandtnis)」という道具の存在構造が形成される。たとえば、外へ出かけようというとき、われわれは靴を履く。これは、「外を出歩く」という場面において、靴という存在者が求められているからである。足を怪我することなく快適に歩き回るために必要な道具として、靴という存在者が発見されるのである。

それぞれの道具には、それらが必要とされたり生かされたりする場面や状況が

ある。それをハイデガーは、「適所性」と呼ぶ。その場に適した道具でもって(mit)、その存在者が使用されるあるもののもとで(bei)、存在者はその適所を得る(sein Bewenden haben)のである(SZ, 84)。

この適所性という道具の構造は、先の道具連関によって可能になっている。たとえば外を出歩く際の靴でいえば、まずはその上を歩くための「道路」という存在者が必要であるし、暗い場合は道を照らすための「ライト」も必要だろう。視力が悪ければ「コンタクトレンズ」や「メガネ」も必要になってくるし、外を出歩くためにはそれなりの「服装」も必要になってくる。また、歩きやすいように道路を整備してくれる人やライトの製造者や販売者、コンタクトレンズを買う際には眼科医の診察も必要になるから、その眼科で働いているスタッフなど、「外を出歩く」という行動を支えるさまざまな他者の協力も必要である。そしてそれぞれの道具には、それが使用されるのに適した場面や状況があり、これもまた、適所性の構成要素となっている。このように、多くの他の存在者やそれに適した場面によって紡ぎ出される連関によって、適所性は構成されているのである。

諸々の適所性が一つの全体性を形成することを、もう少しハイデガーに倣った表現で描写してみよう。たとえば、ハイデガーが好んで例に挙げるハンマーという道具で考えてみる。ハンマーという道具は、釘を打つという状況でその適所性を得る。このことをハイデガーは、ハンマーでもって(mit)釘を打つことのもとで(bei)適所を得る、と表現している(SZ, 84)。このとき、釘を打つという動作もまた、それ自体、適所性を持っている。すなわち、釘を打つことは、それによって家を建てることのもとで適所を得るのである。そして家を建てることは、それによって建てた家の中に住まうことのもとで適所を得るのである。

上記の「~のもとで」は、「~のために」と言い換えることも可能である。たとえば、「ハンマーでもって釘を打つことのもとに適所性を得る」とは、ハンマーは釘を打つために役立つ道具である、ということの意味している。道具がそのつど

有する特定の「～のために (um-zu)」という性格を、われわれは先に「手段性」として取り出した。われわれ現存在が道具とかかわるとは、「適所を得させる (Bewendenlassen)」ことなのである。

われわれにはそのつど、その場面で必要な存在者が出会われている。それらの存在者は一定の適所性の内に存在しているのであり、それぞれにその手段性（「～のために」）が備わっている。われわれは道具的存在者をそのつど「～のためのもの」として理解し、彼らと出会っているのである。

3. 存在者が出会われる場としての世界

道具はある連関の内こそ「道具」として出会われる。われわれもその連関の内に存在しているからこそ、道具はその連関において「道具」として現れ、われわれはそれらを使用しつつ存在している。本節では、前節の議論を踏まえつつ、その道具との出会いの場が「世界」であることが明らかにされる。また、『存在と時間』における世界分析から、道具的存在者が出会われる根拠として世界が考えられていること、そしてさらにその世界の根拠として現存在の存在である実存が想定されていることを取り出し、世界と実存の関連を明らかにすることを目指している。

3-1. 世界概念の多義性

「世界 (Welt) とは何か」という課題は陳腐なものであり、省略可能と思われる。また、従来の研究は、現存在の世界内存在という存在構造や世界の存在構造に触れられておらず、主に世界の内部で事物的に存在しているものに立脚して行われてきた——世界概念のそれまでの分析をこのように捉えつつ、ハイデガ

一は『存在と時間』第14節のなかで主に以下の4つの世界概念を取り上げている (SZ, 64-65)。

まず、世界という現象を記述する方法として、通常、「世界の『内』で存在しているものを数え上げること」(SZ, 63)が考えられている。すなわち、世界の内で出会われるさまざまな存在者の総体として世界を捉える方法である。しかし、そのときに扱われている存在者とは、われわれが普段かかわっている道具的な存在者ではなく、観察や記述の対象となっている事物的な存在者である。われわれが普段それとかかわっているありのままの姿でない(平均的日常性に即したものでない)のに加え、これまでの研究は存在ではなく存在者に即した存在者的分析であった。現象学的に世界を記述するとは、われわれの日常性から切り離し観察の対象へと世界を加工することではない。また、ハイデガーが解明しようとしているのは、存在者の本質(それが何であるか)ではなく、存在者の存在構造や多様な存在に共通している「存在する」という事態そのものである。従来の方法では、現象学が求めている「存在や存在構造としておのれを示す当のもの」(SZ, 63)として、世界という現象を扱えていない。したがって、この方法で取り出された世界概念は、存在者的で非現象学的なものである。

つぎに、上記のように数え上げていった存在者の存在を取り出すという方法が考えられる。しかし、上でも述べたように、そこで問題となっているのは、われわれに身近な道具的な存在者ではなく、あくまでも事物的な存在者である。したがって、そこで扱われている存在もまた事物的存在である。また、世界の内で存在しているものを数え上げるという時点で、すでに世界という現象が前提とされてしまっている。そういった存在者を総体として捉え、その存在を探求したとしても、それは「存在者のそれぞれの多様性を包括している領界(Region)」(SZ, 64)に過ぎない。したがって、こうした方法で扱われている世界概念は、たしかに存在論的ではあるものの、われわれに普段出会われている仕方(道具的存在者)で

はなく事物として存在者を捉えている（存在者をありのままの姿で取り出していない）がゆえに、現象学的なものとは言えないのである。

『存在と時間』における世界概念の分析は、存在了解を備えている現存在の根本構造が世界内存在であり、そこに世界が構成契機として含まれている上記2つの従来の捉え方には、それが欠けていた。したがって、前存在論的かつ実存論的な世界概念として、ハイデガーは「事実的現存在が『その内で』事実的現存在として『生活している (leben)』当のもの」(SZ, 65)を挙げる。

最後に、世界という概念は、現存在がその内で生活している（存在している）場という上記の世界概念の構造を指す場合もある。すなわち、「世界性 (Weltlichkeit)」という存在論的・実存論的な概念としての世界である。

上記の内容を簡潔にまとめると、以下のようになる。

1. 「世界の内部で物的に存在しているもの（すなわち「存在者」）すべて（集合体）」という存在者的概念としての世界
2. 上記1の存在者の存在を意味する存在論的概念としての世界
3. 現存在がその内で事実的に存在しているところのもの（場）という前存在論的かつ実存的な意味での世界
4. 世界の構造である世界性という意味での存在論的・実存論的な世界

3-2. 『存在と時間』における世界

従来の世界概念の分析は、上記の1と2に相当する。そこでは、世界内存在という現存在の構造が捉え損なわれているうえ、世界性という現象が飛び越されてしまっている (SZ, 65)。また、これまでの研究では物的存在者、すなわち「自

然 (Natur)」がその分析の対象となっていた。しかし、自然とは世界の内部で存在する存在者に過ぎず (SZ, 65)、それ自体の内にすでに世界という現象を前提としている。

『存在と時間』の世界分析は、存在一般の意味の解明という最終目標へ至る途上の分析である。存在了解を備えている現存在が世界内存在という統一的存在構造をもち、それを構成するものの一つとして世界が見て取られているのである。したがってここで行われているのは、暫定的な主題である現存在の存在、すなわち実存の解明であり、そのなかで扱われる世界もまた、実存的・実存論的なものでなければならない。このことを踏まえ、『存在と時間』において世界とは、現存在がその内で存在する場 (上記3) として捉えられている。

われわれ現存在はつねにすでに、世界の内で存在している。世界の分析も、現存在の特定のあり方に立脚した世界ではなく、現存在が日常的かつ平均的にその内で存在しているところのものを扱わなければならない。

世界内存在は、したがってまた世界も、現存在の最も身近な存在様式としての平均的的日常性という地平の内で、分析の主題となるべきである。日常的な世界内存在が追求されるべきであり、また、この日常的な世界内存在を現象的な手がかりとして、世界といったものが視野のうちに入ってこなければならない (SZ, 66)。

日常的現存在に最も身近な世界を、ハイデガーは「環境世界 (Umwelt)」と呼ぶ。したがって『存在と時間』の世界分析では、主にこの環境世界が扱われている。

われわれ現存在はこの環境世界の内で存在し、その内でさまざま道具的存在者とかかわっている。世界という場の内で出会われるため、現存在以外の存在者は「世界内部的な存在者 (das innerweltliche Seiende)」とも呼ばれる。

前節でわれわれが日常的にかかわっている道具的存在者の分析を検討してきた。この道具的存在者が世界内部的な存在者である以上、当然、そこでは世界が何らかの形で前提とされている。

世界内部的な道具的存在者が配視的な配慮の気遣いにとって近づきうるものであるということでもって、そのつどすでに世界は、あらかじめ開示されている (SZ,76)。

ハイデガーは道具の存在である道具的存在と世界の構造である世界性の間に関連性を見出している。したがって、『存在と時間』で議論されている環境世界の構造を明らかにするには、当然、先の道具分析も視野に取めなければならない。

3-3. 世界の構造

第2節で確認したように、道具的存在者には適所性という存在構造が含まれているのであった。たとえばハンマーの場合には、そのハンマーでもって釘を打つことのもつて適所を得る。もう少し端的に述べれば、ハンマーという道具は釘を打つという場面においてこそ有用なのである。

このように世界内部的な存在者の存在としての適所性は、それ自体で或る連関を形成するのであった。ハンマーでもって釘を打つことのもつて適所を得る。そして釘を打つことは、それでもって (それによつて) 家を建てることのもつて適所を得る。家を建てることは、それでもって建てた家のうちに住まうことのもつて適所を得る。最後の家のうちに住まうというのは、われわれ現存在の存在可能性である。すなわち、家を建てるのは、現存在がその家で生活するため、もっと端

的に言えば、現存在の存在のためなのである。

それぞれの道具的存在者にどのような適所性が与えられるのかは、そのつど適所全体性によって規定されている。この適所全体性は、最終的に現存在の存在へと帰着する。先のハンマーの例の場合、その適所性連関を辿っていくと、「住む」という現存在の存在可能性へとたどり着くのである。適所全体性の「目的であるもの (Worum-willen)」(適所全体性を成り立たせているもの)は、現存在の存在なのである。

適所全体性自身は最後には或る用途性へと帰り着くが、この用途性のもとはいかなる適所性もはや得られず、この用途性自身は世界の内部で道具的に存在するという存在様式をとる存在者ではなく、その存在が世界内存在として規定されている存在者、すなわち、その存在構造に世界性自身が属している存在者なのである (SZ, 84/強調原著者)。

ハンマーが打つためのものとして出会われる適所性連関は、最終的に「住む」という存在可能性、すなわち現存在の存在 (実存) へとたどり着くのであった。適所性とは、道具分析から取り出された道具的存在者の存在様式である。ハイデガーは『存在と時間』第 18 節で、この適所性連関を再度、実存の側から捉え直すことで、世界内存在に含まれる世界の構造を浮かび上がらせようとしている。

目的であるもの (Worumwillen) とは、或る「～のため (Um-zu)」を、そしてこの「～のため」は或る「そのために (Dazu)」を、そしてこの「そのために」は適所を得させることの「なにのもとで (Wobei)」を、そしてこの「なにのもとで」は適所性の「何によって (Womit)」を有意義化する (bedeuten) (SZ, 87)。

これまで繰り返し使用してきたハンマーの例を用いれば、次のようになる。現存在の「住む」という存在可能性は家を建てることを、この「家を建てる」ことは釘を打つことを、そしてこの「釘を打つ」ことがハンマーを、それぞれ有意義化する。

このように、先で道具的存在の適所性から現存在の存在可能性へと分析された適所性連関が、今度は現存在の存在可能性から道具的存在者への「有意義化 (bedeuten)」連関として捉え直されている。この有意義化連関全体を、ハイデガーは「有意義性 (Bedeutsamkeit)」と呼び、これを世界の構造である「世界性 (Weltlichkeit)」として捉えている (SZ, 87)。

3-4. 世界と実存

道具がその内で出会われる適所全体性を成り立たせているものは、現存在の存在であり、そして、この現存在の存在からさまざま有意義化作用が広がってゆくことで、世界が構成される。

ところで、われわれ現存在は、そのつど一定の可能性へとおのれを企投する (entwerfen) ことで存在している。たとえば、学生として存在している現存在は、「学生である」という可能性へとおのれを企投している。あるいは、レポートを作成中の現存在は、レポートを完成させる (あるいはレポートを提出する) という可能性へとおのれを企投しつつあるのである。このように、現存在はそのつど何らかの可能性へと企投することで存在しているのである。

現存在がいかなる可能性へとおのれを企投するかによって、現存在のあり方は変化する。「レポートを完成させる」という可能性へと企投している現存在と、「映画を視聴する」という可能性へと企投している現存在のあり方は、傍から見ても

わかるぐらい異なっている。この現存在のあり方が異なるのに応じて、当然、そこから広がっていく有意義性連関も変化する。そして、有意義性連関が変化すれば、それに応じて道具的存在者の現れ方も変わってくる。

たとえば、パソコンという道具で考えてみよう。2人の現存在がそれぞれ別のパソコンに向かっているとす。そのうち片方はパソコンを使ってレポートを作成し、もう片方はパソコンで映画を視聴している。彼らはそれぞれ「パソコン」という同じ道具的存在者を使用しているのであるが、そのパソコンの出会い方は両者の間で異なっている。前者においてはレポートを作成するための道具として、そして後者においては動画を視聴するための道具として出会われているのである。

このように、同じ道具であっても、その出会い方は、現存在がどのような可能性へとおのれを企投しているかによって変わってくる。それは、そもそも道具が出会われる世界が、「目的であるもの」として現存在の存在をその根拠として成り立っているからである。「レポートを完成させる」というあり方をしている場合と、「映画を視聴する」というあり方をしている場合とでは、当然、そこから生じる有意義性連関も変わってくる。レポートを完成させようとしている現存在に対しては、パソコンや机、椅子といった存在者はそれに適した道具として現れるし、映画を視聴しようとしている現存在に対しても、パソコンや机などの道具はそれに適した道具として出会われているのであり、決してレポートを作成するための道具として出会われているのではない。

現存在のそのつどの存在可能性によって、どのような道具的存在者がどのような場面で適所を得るのが順に規定され、適所性連関が有意義化されていく。この有意義化する働き全体が有意義性と呼ばれ、これが世界の構造である世界性として捉えられたのであった。世界というのは、つねに一定で不変的な構造を持つのではなく、その都度のわれわれ現存在の存在、すなわち実存に応じてその構造

も変わるのである。

4. おわりに

以上、本論では『存在と時間』の道具分析と世界概念の分析を取り上げ、世界とわれわれ自身の存在である実存の関係を明らかにした。先述の通り、世界とは、われわれと無関係に存在する単なる空間なのではなく、われわれのあり方に応じてその様相が異なるわれわれがその内で存在すると同時にその内で多様な存在者が出会われる場なのである。

世界がこのようにわれわれ現存在と密接に結び付けられて捉えられているのは、ハイデガーが現存在の根本構造を「世界内存在」と捉えていることにも起因している。この世界内存在という統一的構造を、ハイデガーは「世界とは何か」、「内存在とは何か」、そして「世界内存在（あるいはそうした構造を持つ現存在）とは誰か」という問いに分解して考えていく。本論ではこれらのうちの最初の「世界とは何か」についてのハイデガーの分析と答えを扱った。しかし、他の2つの問いに関して、本論で全く触れられなかったわけではない。表立たずではあるが、これらについても実は、道具分析や世界概念の分析がすでに触れられている。とりわけ、本論の最後に、「内存在 (In-sein)」について簡単に触れておきたい。

ハイデガーは『存在と時間』において内存在を分析するなかで、現存在の本質的な存在性格である「開示性 (Erschlossenheit)」を取り出す。開示性とは、簡単に言えば、「理解 (Verstehen)」、「情態性 (Befindlichkeit)」、「語り (Rede)」という3つの契機によって存在が開示されていることを指している。「現存在」という術語は、この存在者には本質的にそうした開示性が備わっていることを暗示しようとして選ばれたものなのである (SZ, 132)。

現存在はそれが存在するかぎり、その開示性を欠くことはない。開示性が欠け

るとは、現存在が存在しなくなるのと同義なのである。したがって、現存在にはつねに、おのれの存在が何らかの仕方で開示されつづけている。そしておのれの存在が開示されているということは、同時に、世界もまた開示されているということである。現存在の存在が世界性の根拠となっていることは、先に述べた通りである。つまり、われわれ現存在は、存在するかぎり、絶えず世界を開示し続けているのであり、われわれは世界を欠いて存在することができない。したがって、開示性とは、単に存在が開示されていることを指すのみならず、同時に世界が開示されていることも指すのである。この開示性概念の詳細な分析および世界概念との具体的な関係については、稿を改めなければならない。

註

- (1) Heidegger, M. (1927/2006) *Sein und Zeit*. Max Niemeyer Verlag Tübingen. 以下、この書から引用する際には、略号 SZ に続いて頁数を記す。また、引用する際に下記の翻訳を参照した。原佑／渡邊二郎訳 (2003) 『ハイデガー存在と時間 I～III』中公クラシックス、中央公論新社。本論で使用しているハイデガーの術語に関しては、基本的に『ハイデガー辞典』(ハイデガー・フォーラム編、2021年、昭和堂) に則って訳語を選択している。
- (2) 『存在と時間』第16節において、道具の「物」としての現れに関して以下の3つの事例が言及されている (SZ, 73-74)。まず、道具が壊れていたりその素材が使用用途に合っていなかったりして使用不可能な場合、本来なら目立たない道具は「目立っている (Auffälligkeit)」という性格を伴って事物的存在者として現れてくる。また、必要な道具が欠けている場合、つまりそもそも必要な状況においてその場に無い場合、「押し付けがましい (Aufdringlichkeit)」という性格を伴って事物的存在者として出会われる。

最後に、道具が邪魔になっている場合、つまりその場に適していない場合、それはもはや道具としてではなく「手向かう (Aufsässigkeit)」という性格をもつ事物的存在者として現れてくる。ただし、これらの「物」としての現れは、いずれも直ちに「修理するためのもの」であったり、「購入するためのもの」であったり、「取り除くためのもの」のように再び配慮的に気遣われることになる。